

## 留学速報

## オレゴン・ヘルス・アンド・サイエンス大学

中野 貴明\*

今、僕はオレゴン州ポートランドのダウンタウンにある自分のアパートにてこの日記を書いています。北里大学病院、麻酔科6年目の僕がなぜここアメリカで留学生活を送るようになったかは未知のところはありますが、少なくともこの留学が非常に充実しており、そして楽しいものであることは確かなようです。

## オレゴンへの道

では、早速、僕の留学の話へと進みましょう。僕の留学先はアメリカ、オレゴン州ポートランドにある『Oregon Health and Science University』(OHSU)といえます。

教授にこの話を聞いた時には、『オレゴン州ってどこ？オレゴンから愛？』のような感じで、全く場所もわからず、さらに『オレゴンから愛』のイメージが強く、俳優の古谷一行？牧草地帯？朝夕は牛の世話？とのイメージ。しかし、アメリカに憧れていた僕は誰にも相談することなく、その場で即答でした。

ここオレゴン州はアメリカの Northwest 地方、西海岸の上方向に位置します。イチローの所属チームである、シアトルマリナーズがワシントン州にあり、そこがアメリカの最北西部分で、カナダに接しています。そのワシントン州の南に位置するのがここ、オレゴン州です。人口 350 万人で、ポートランド地区には 50 万人が住み、アメリカで、『住みたい都市』の 1 位に選ばれるほど、様々な面で優れている場所なのです(物価が安い、消費税がない、治安がいい etc)。

そして、この辺境の地であるオレゴン州にも世界に誇る企業の本社があります。その一つが、

“Intel” ご存知の通り、パソコンに入っているあれです。

そして、もう 1 つが “NIKE” です。これには説明など要りませんね。ポートランドには直営店もあり、なかなかおしゃれな店舗です。この様な事を調べているうちに、徐々に留学への不安もなくなり、お話を頂いた後、2ヶ月と数日を経て、あっという間にアメリカに旅立つ日となってしまいました。

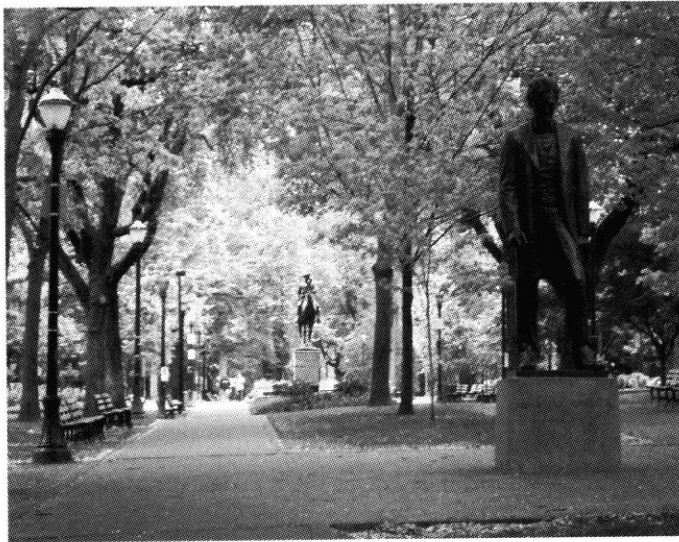
## 旅立ち・そして最大の敵

2006年4月8日、前日まで手術室で働き、これから2年間という実感もないまま、成田空港からポートランド直通のノースウエスト航空 006 便にて、寝ること 8 時間、ついに憧れの地アメリカに降り立ったのでした。ポートランド空港には OHSU へ先に留学していた筑波大学麻酔科の田口典子先生が迎えに来て下さっていたので、特に迷うことも無くホテルに無事到着。こうして書いていると何事も無かったかのように感じますが、ここから数日間、海外生活ならではの苦労が始まったのです。確かに、OHSU には田口先生以外にも日本人の先生が居り(兵庫医大の神経内科の北野英人先生)、そのお二人に大変お世話になり、多くの情報を頂き、日本人不動産屋さん、日本人保険屋さんも紹介して頂き、生活の大部分は順調でした。では、苦労とは何ぞや？苦労とは英語だったのです。以前から留学に憧れていた僕は、2年前から英会話学校に通い、それなりに英語を勉強してきたつもりではありました。しかしながら、実際にアメリカ人と話すとき……最初は全くといっていいほど理解不能。英会話の先生がよほど優しく話してくれていたかを実感しました。一人でレストランに入るのは日本に居るときから苦手だったの

\*北里大学大学院医療系研究科麻酔科



ポートランドダウンタウンの中心、ランドマークであるパイオニア・コートハウス・スクエア



ダウンタウンの公園 (North Park)

で、最初の数日、食事は主にファーストフードでした。この時も・・・店員さんの『お持ち帰りですか?』が理解できず・・・英語では『Here or Gone?』と聞かれます。店員さんがその場で即席の英会話教師になってくれました。『Smile下さい』なんて余裕は全くなし!!

最初の数日は、もちろん自分で行わねばならない手続きも多く、例えば、電気、水道、携帯電話、インターネット、テレビこれらの契約は自分で行わねばならず、それでも面と向かっての会話は何とかできていたのですが、最大の敵は、電話での

会話だったのです。電話越しの英会話とはなんと聞き取り難いものなのでしょう。自動音声のこともありましたが、その際には数回電話し、同じ内容を何回か聞きながら進んでいくといった感じで、それだけで疲労困憊。さらに、家具の配送会社さんとの会話がうまくいかず、配送日が一日遅れ、何もない自分のアパートで床に買ってきたタオルケットにくるまりながら、音1つない部屋で一晩過ぎた時には来て早々、ホームシックになるころでした。しかしながら、ここオレゴン州の人たちは性格が暖かく、このへたな英語を話す日本人



北野先生の送別会で全員集合

の言葉を理解しようとして気長に聞いてくれることには感謝でした(オレゴン州の人は温かい人が多いとは日本に居るときから聞いていたのですが、こんなに優しいとは思っていませんでした)。

### OHSU での研究

ここ OHSU での研究は性ホルモンの脳梗塞に与える影響と、その臨床への応用が課題となっています。ご存知とは思いますが、エストロゲンが脳保護的な効果を与える、という内容です。日本では僕は中大脳動脈塞栓(MCAO)ラットモデルにて薬剤の脳への効果を研究課題にしていますが、こちらでは、『whole brain ischemia』をモデルとしています。こちらの研究チームはかなり大きく、MCAO ラットチーム、MCAO マウスチーム、我々の『whole brain ischemia』チーム、そして Cell Culture のチームに分類され、みんながそれぞれ性ホルモンの効果を追いかけています。僕がこの大学で驚いたことは、アメリカでの研究は日本の様に、臨床の合間にというのではなく、実験の腕の安定を第一とし、完全に研究が臨床から独立していることでした。そして、その追求の仕方も半端無く、『こんな風にも考えるのか、ここまでするのね・・・』と日々新たな知識、考え方に驚きを覚えています。この大学は以前、研究では全くといっていいほど無名でしたが、3年前にジョンズホプキンス大学より麻酔科全体で移動をしてき

て(臨床部門、研究部門全体で移動してきたのです。)以来、P. Hurn 教授を中心とした研究部門の活躍はすばらしいもので、なんと今年は麻酔科で NIH のグラント数が全米3位にまで躍進したとの事でした。こんなにすばらしい大学に留学させていただいているのは光栄の一言に尽きます。研究部門としては皆で協力し、色々と勉強し教え合い、話し合いをしながら実験をするという、本当にすばらしい環境だと思います。周囲の環境もよく、敷地内にはシカ、リス、タヌキなどにしばしば出会います。そして、自然のすばらしいことは言うまでもありません。まるで、原生林にでも来たかのような場所にあるのです。日本で言えば田舎なのですが、アメリカでは都会近くにもこのような自然が多く残されているのです。

### アメリカでの生活

留学とはもちろん生活を伴うものです。アメリカで一人暮らしをするにあたり、全く心配がなかったと言えばウソになりますが、もともと楽観主義なため、それほど生活というものに戸惑いはありませんでした。しかし、日本と違うことも多々ありました。例えば、病院にかかっても窓口で支払いをしない、スーパーの会計では買い物をかごから出してベルトコンベアの上に並べるなど、車の運転も左ハンドル右側通行に慣れるのが大変でした。右左折時には必ず、『右右右・・・』と

つぶやくへんてこな日本人がいたものでした。しかしながら、周りの日本人の先生方にも支えられ、アメリカ生活にも徐々に慣れ、今ではすっかり在住者となっています。そして、僕が何よりも暮らしやすいと思うことは物価の安さ。日本では考えられないほど、食料もガソリンも安価なのです。一人暮らしで自炊の毎日にこの安さはかなりの手助けとなっています(牛肉 100g で 50 円, ガソリンも高いと言われながらも 1 リットル, 80 円くらいです)。そして、驚く事に、ダウンタウンを中心とした地域では乗り物が無料なのです。ここポートランドでは、バスや路面電車などの交通網が良く整備されており(これには MAX という中距離電車や、StreetCar という市街地を走行する路面電車そしてバスが含まれます)ポートランドダウンタウンの住人にとってこの上なく便利なものです。このように、今回の留学は何不自由に感じる事もなく充実した留学となっています。最初は苦労した英語も、周りのフェロー達と話し、指導教授の先生と、実験マネージャーと実験の話をしているため、少しずつながらも上達はしてきているように思われます。そして週に 1 回、夜間の英語学校に通っており、様々な国の人たちとの交流も増え(ブラジルの若い女性、台湾の陽気なお姉さん、インドの大学教授など)、様々な感性との触れ合いも楽しんでいます。

## 終わりに

アメリカに来て、早半年が過ぎようとしています。つまりは麻酔から離れてもう半年も経ってしまったのです。窓から外行く人を眺め、麻酔のことを考えてしまいます。この人たちの BMI はいくつなのだろう?挿管困難そうだな、硬膜外は何cmにあるのだろうか……。そんなことを考えると、早く臨床に戻りたいという気持ちも起きてきます。ここアメリカで、研究の大切さを学び、そしてその技術を維持する事大切さを学びましたが、やはり僕は麻酔が好きなのです、両立というのは難しいことと思いますが、両立が出来ればベストと思います。麻酔科の少ない日本では“1に臨床2に臨床、人が十分なら実験に”と実験は後々に回されてしまいますが、麻酔科にしか出来ない観点で立てられた仮説も多々あると思います。ここで習った技術だけでなく気持ちをもこれからの麻酔科生活に役立てて行けたらそれこそがここで最大の収穫になるのでしょう。残りの留學生活、自分の人生へのすばらしい経験として大切にしていきたいです。

最後になりましたが、この投稿をするにあたりお世話になった方々に御礼申し上げます。そして、留学を推薦して下さった外須美夫教授、大学院中でもあるにもかかわらず、留学の許可を下さった岡本浩嗣助教授には心より感謝申し上げます。

雨季へまっしぐらの 2006 年 10 月某日